
仁川君からのお願い

巻機 鶴

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

仁川君からのお願

【Nコード】

N9419X

【作者名】

巻機 鶴

【あらすじ】

俺、コックさん。アルバイトの仁川君からの頼まれて、彼のお母さんのお店を手伝いに行ったんだけどさ。マイッタよ。ひどかったんだ。聞いてくれよ。(mixiより転載)

コンクリートジャンルに囲まれた、とある街の歓楽街。

宵闇が迫る頃。仕事を終え、少しネクタイを緩めて談笑する人達や、開放的な服装で自己主張する若者達が、キラキラと光るネオンで埋め尽くされた通りを往き来している。少し先に見える路地の入り口には『親不孝通り』の看板が、訪れようとする夜のとばりを跳ね返すように、燦然と輝いている。

そんな繁華街の中で、一軒のスナックがオープンの日を迎えた。絨毯や壁紙、椅子テーブルなどの調度品から高級感が漂う、落ち着いた雰囲気のお店だ。

30人も入れればいっぱいになる店内には、座りきれないほどのお客でごったがえしている。ある種独特の雰囲気を持ったお客さんばかりだ。

店内に居る人達は皆知り合いらしく、ある芸能人と見間違っ程の美人ママを中心に、礼節を持ってお祝いの言葉を述べている。

美人ママのひとり息子も手伝いに来ているが、何故かお客はママと息子に気を使って働かせようとしない。

「まあいいじゃないですか、座っていて下さい。ボンも座って。さあ、一杯！今日は祝いだ」

どっちがお客か分からない。

そんなわけで、手伝いに来ている俺に、全ての用事が飛んでくる。

「おい！その。ビール持って来い」

「はい、ただいま」

返事はしたが、誰が頼んだのか分からない。人が多すぎる。

カウンターの中に居る俺には、人たがりに遮られて客席の様子がよく分からない。

カウンターを出て『ビールのお客様！』と大きな声を張り上げながら、人の間をぬって運ぼうとする。その途中でも

「こつちにもビールな」

「はい」

「灰皿ねえぞ」

「はい」

「おい、火！」

「はい」

「ビールまだか」

その声で注文の主が、分かった。

「お待たせしました」

やっと、たどり着いた。

しかし、情け容赦なくウイスキーだの焼酎だのつまみ持って来いだの煙草買って来いだの、次々と注文が飛んでくる。誰が頼んでいるのかすら分からない。

物理的に不可能でしょ、俺一人だよ。まったく！ メチャクチャだよ。

こうなりややくそだ！

やってやる！

でも、体はひとつ、手は二本だからな！

こんな筈じゃなかったのに。やっぱりこうなるか。
嫌な予感はしていたんだよ。

始まりは、ホテルの調理場で、調理補助兼洗い場のアルバイトをしている仁川君のお願いからだった。

仁川君は、いつもニコニコ顔の爽やかな大学生。ホテルのスタッフからも好かれている。

その仁川君のお母さんが、スナックを始めるといふ。

仁川君はオープン初日と次の日に、ちよつとしたつまみ作りに来て欲しいと、俺ともう一人のコックにお願いに来た。 普段一生懸命頑張っている彼のためにも、気持ち良く

『いいよ』と言ってあげたいところだが、問題が……ある。

仁川君の亡くなったお父さんは、この辺一帯を仕切る、やくざの組長だった。

その奥さんが店を開くとなれば、大勢の極道さんがお祝いに駆けつけるわけだ。なんせ先代の姐さんですから。放っておく訳がない。そんなところに手伝いに行きたくない。

初日、二日目なんて、そんな人だらけじゃないの？

「仁川君、行きたいけど大丈夫なのかい？こっちの方は」

俺は、頬つぺたを人差し指で切る真似をして聞いた。

「大丈夫です。出入り禁止だつて言つてあるみたいですから。ただ、お祝いを持つてくる人は居るかもしれません」

「なら良いけど、心配だな」

かなり不安は残るが、彼の言葉を信じて行くことにした。

初日が俺で、二日目はもう一人に決まった。

下見がてら、仁川君と一緒にそのスナック行くと、びっくり！

名取裕子がいた。

いや、違った。名取裕子にそっくりな人、仁川君のお母さんだった。

どぎまぎしながら挨拶を交わした後、つまみのリクエストを聞く

と、
「美味しい和牛、フォグラ、鮑が良いわ」

と恐ろしくも、簡潔な答えが帰ってきた。

「調理場拝見していいですか？」

「無いわよ」

即答。&俺 即死。

「……………そつ、そうですか」

冷蔵庫は沢山あるけれど、火は家庭用のガス器具程度の物しか無い。

「50人前位あればいいわ。沢山要らないのよ、ほんのちよつとあればいいんだから」

『はいっ？　ここは魔法の高級レストランですか？』
心の中で叫ぶ。

和牛？　フォグラ？　鮑？

どこがちよっとしたつまみなんだよ？

おととい来やがれ！

こんななんにもない所で、どうやって作れっただよ！

料理をなめるな！

と言いたいところだが、言えないよ。そんなこと……。

オープン当日に食材を持ち込んで、仕込みして、仕上げで、盛り付けして、なんて無理。そんな時間も道具もない。

ホテルの調理場で作ってくるしかないな。

オープンは三日後。皿や備品の確認をしてスナックを後にした。

相棒と手分けして、勤務時間外にシェフの許しを得て料理を作った。

面白半分で、他のコック達も手伝ってくれたのでスムーズに、かつ良い出来栄えに仕上がった。

冷製・和牛のオーバーナイトロースト・山葵とたまり醤油風味のジユレ添え。

定番フォアグラのテリーヌを和風にアレンジした、大吟醸酒と山椒風味のテリーヌ・わらびと黒胡椒風味のブリオツシュ添え。

冷製・鮑の白ワイン蒸し・大葉入りレムラードソース。

それぞれの料理が添え物と共に出来上がった。

これなら胸を張ってお客様に出せるし、ママさんもきつと喜んでくれることだろう。

あの綺麗なママさんを想うと、少し胸が騒ぐ自分に気付いた。

『馬鹿か。仁川君のお母さんだぜ。しかも、やくざの……。何を妄想している』

ひとり呟いた。

オープン当日の午後。料理をホテルからタクシーに乗って運んだ。繊細なジュレやソースや主役の料理達は、揺れなど禁物。それに、冷やしておかないと壊れる。

冷製料理は温度が全て。適温を保たないと、せっかくの料理が台無しになる。

幾つもの発泡スチロールに氷を敷き詰め、過度に冷えすぎないようにクッションを入れ、料理を丁寧に納めてスナックに向かった。

「こんにちは。失礼します」

カランカランと鳴るドアを開けて店に入った。

店内には、お祝いの花が壁際にびっしりと並んでいて、その匂いにむせるほどだ。

「鴨川さん（俺の名字）ありがとうございます。今日はよろしくお願いします」
つかつかと歩み寄って、迎えてくれた。

ママさんにはっこりと笑って、ちょこんと頭を下げた。

やっぱり、綺麗だ。

「あつ、いえ。こちらこそ、よろしくお願いします」

黒髪をアップにして、後れ毛ひとつないうなじの白さに、目が釘付けの硬直状態。自身の別の部分も硬直化し始め、

『落ち着け！ 静まれ！』

と腰を引いて、手を前に回す俺だった。

料理を運びますから、と言って回れ右して逃げた。

料理を運び、チエックしながら冷蔵庫に収めて一安心したところで、「悪いけど私、用事を済ませて着替えてくるわ。そんなに遅くならないから、留守番お願いね」

「はい、いつてらっしゃい」

カランカランの音と共に行ってしまった。すぐにまたドアが開き、「これ、うるさいわね。外しといて」

顔だけ出してカランカランを指差し、再び出ていった。

ひとりぼっちになって暇な俺。しょうがないから、お店観察をす

る。引き出しや収納扉の中をチェック。酒やソフトドリンクのチェックをしていると、

「御免よ」

と言つて人相の悪い男が、バッグを担いで入ってきた。

店の中を見回しながら、

「姐さん、居るかい」

「出掛けています。用事を済ませて、着替えて来ると言っていました」

「そうか、居ねえのか。で、お前、何だ？ ここの従業員か」

「今日だけの手伝いです」

「そうか。じゃあこれよう、渡しといてくれ」

男はシヨルダーバッグを開けると無造作に、バッグいっぱいに入っている分厚い白い包みを次々と取り出した。

普通の祝儀袋には収まらない額の札束らしいものが、綺麗な和紙に包まれて、さらに水引が巻いてある。御祝の文字と名前が書かれている。それが幾つもある。

俺は、いったい幾らあるのかと、呆気にとられて見ていると、

「おめえも、こんな大金置いて行かれても困るわな」

男は祝儀をテーブルに広げたまま、携帯を取り出した。

「政です。ご無沙汰しています。今、兄貴やら、あっちこっちの親分さんの使いで姐さんの店に来てます。……………そりゃ分かってます。だから、店開ける前にとまって……………姐さんが水臭いこと言うから、みんながっかりしてます。せめて一日くらい、姐さん囲んで、姐さんの店で祝いの酒飲みたかったって……………置いて行こうと思いましたが、留守番してる奴が面喰らってますから……………一旦帰ります。姐さん居る時にもう一度伺いますから、それだけは許して下さい。お願いします」

男は祝儀をバッグにしまうと「また来るわ」と言つて出ていった。

俺は妙に疲れた。たつたら分ほどの出来事なのに、男が帰ると緊張感から解放されて肩の力が抜けるのが分かった。

一千万？ 二千万？ 幾らあったのかは知るよしもない。
改めて、やくざの恐ろしさを感じた。

そして、嫌な予感がした。

まさか

『今日だけ良いわよ』

何てこと言わないよね。

その後にも、祝儀を渡すために訪れたやくざが数人。いずれも、ママが居ないと知ると『なんとか組のなんとかだ。伝えておけ』そう言つて帰つていった。メモはした。

訪れる人間は殺伐としたやくざだけ。最初の人は、何となく好感を持ってたが、後の人達は刺々しいだけだった。

その内の一人は、祝儀を渡せない腹いせを、俺にぶつけてきた。

「何処に行つたか分からねえで、留守番務まるわけねえだろ。ああ
っ」

鬱陶しいから帰つて欲しい。用事と住まい、どちらも俺は知らない。でも、それをあんたに咎められる覚えはない。例え知つていても、教えない。お前は嫌いだ。

何とも言えぬ、重苦しい雰囲気嫌気が差してきた。

「今日だけの手伝いなので、分かりません。携帯にかけてみたらどう
うです」

「生意気ぬかすな、コリア！」

顔を近づけて凄んでくる。こういうのをチンピラと言つのだろう。ママさんとどういふ繋がりがあるか知らないが、祝儀届けに来てそれが出来ずに腹立てて、堅気のお手伝い殴つて帰つたら、ママさんに向ける顔あるのかい。それでも、やりたきややれ。今晚顔張らしながら、ここの仕事するよ。ママさん困るだろうな。そう思いながら相手を見た。

「けっ、けつたくそわりいぜ」

変な日本語を残して去つて行つた。

ますます、嫌な予感がしてきた。

「ただいま」

「おかえりなさい」

和服を着て戻ってきたママさん。色つぼい。惚れたかも。

光沢のある白い生地に、大きな百合の花が背中と裾に。山吹色の帯に、真っ赤な帯止め。

店に飾られた百合の花をも圧倒する美しさだ。

ママさんは俺に背を向けて、着物と揃いの生地で出来たバッグの中を覗いている。

着物の後ろ姿は、体のラインがはっきりと分かるので、鼻血が出そうだ。

ママさんは携帯で、何やら話している。

「……………だから、今日はいいわ。明日からお願い」

どうやら、女の子に断りの電話を入れているらしい。

『何故、そんな電話をかけているんですか？』

そんな電話を三本し終わってから、さらに電話をかける。

「政。今日だけは許すから来て良いわよ。皆に伝えてちょうだい。

今日だけだからね。明日からは出入り禁止、分かったわね」

ママさんは何事もなかったように、

「大勢来るから、グラスはもう出しときましょ。テーブルも繋げておいて。つまみは適当に置いておけば良いわ」

悪い予感、見事的中!!!

嬉しくて涙か出ます。どうもありがとうございます！

こつなりゃ、やりますよ。ああ、やりますよ！ やらせて頂きます！

「分かりました」

今さら、ママさんに何だかんだと言ってもしょうがない。

女の子は来ない。これから来る連中は、ママさんにわがままなど言えるはずもない。俺が居なけりゃ、ビールでも何でも、下っぱが出すだろう。だが、俺がいる。俺の忙殺決定！

阿呆らしくて、帰りたい。

だが、あの可愛い料理達はどうなる？

帰れない！

いや、きつちり出すまで

『帰らない！』

極道達の宴は、朝まで続いた。

おしまい。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9419x/>

仁川君からのお願い

2011年10月26日11時05分発行